

吉祥果

泉鏡花作

一

傳へ聞く、大聖世尊釈迦牟尼佛、天竺迦比羅衛國、  
猫主山の山奥なる、怪しき孤家に宿らせ給ひし、夜  
も深々と更くる頃、

「迦葉々々。」とお召しある。

「はつ、」と申して、其時御供に侍ひし大迦葉  
と言ふ御弟子、同じ孤家の一室處に、今しがたまで  
お傍に居て、偶と戸の外に出でたるが、一寸お召し  
の御聲と共に、急いで御前に畏まる。

「孰方へ参つたぞ。」

「は、は、餘りの暑さに、咽喉の渴き候處、山清  
水の流の音、清々しう聞えましたれば、臺下にも差  
上げたたく、水を掬みに立出でまして、これへ取つて  
参りました。」と燈も無き星明に、鐵鉢を差出す。

「迦葉、其の水を飲みたるか。」と、心ありげ

に問ひ給ふ。

「先づ台下に差上げまして、お後を私が頂きませうと、未だ一滴も飲みませぬ。」

「然あらむには仔細なし。和僧が清き流と思ふは、此の孤家の婦主人が、朝夕の餌食とする、澤山の小兒の血の、小川のやうに流るゝなり。疑はしくば、熟と見よ。」

迦葉が捧ぐる鐵鉢に、掌を翳し給へば、御身の光明暗きを照して、恐しや、どろ／＼と、持つ手も重る黒血の凝體。鐵鉢の周圍に滴る露は、紅のやうな絲を引く。

「あな、無慚や。」と言ふまゝに、かなぐり棄てむと起ちけるを、

「いや、鐵鉢は其のまゝ置け。懸て用ゐる事あらむ。さて、和僧には氣が着かぬか、遠き納戸と思ふ處に、悲しげなる小兒の泣聲聞ゆるが。」

「仰おほせの通り、絶たえい入るばかり、ヒイノと泣なきます  
るが、此家このやの主婦あるしは、千人せんじんの子持こもちと豫かねて承うけたまはれば、寢ね  
靡びれましたか、夜泣よなきてがな、と別段べつだん心こころにも留とめませ  
ぬ。」

「否いなとよ、尋常よのつねならぬ五音いんの調子てうし。命いのちに及およぶ悲鳴ひめい  
と聞きく。疾とく参まゐつて助たすけて得えさせう。いざ立たて、迦かせ  
葉ふ、共ともに来こよ。」

と蟲むしを遮さへぎる紙帳しちやうも無なき、臥戸ふしどを其そのまゝ立出たちいで給たまひ、  
御後おあとに従したがふ迦葉かせふと共に、其その泣聲なきこゑを知るべとして、  
暗くらき廊下らうかを幾曲いくまがりか、藤蔓ふぢづるの橋はしを傳つたふやう、洞穴ほらあなの  
如ごとき山家やまがの勝手かつてを、御胸おんむねの内明うちあきかに、蹈迷ふみまよひもし給たま  
はず、足疾あしとく衝つと過すぎ給たまふ。

家やの内うちに小橋こばしを渡わたし、母屋おもやの棟むねと離はなれし一室ひとまに、  
蒼あをき火影ほかげ微かすかにさして、泣聲なきこゑは其處そこながら、早はや細々ほそ／＼  
となりてけり。

「それ／＼、今いまの血ちの流ながれ。」  
と世尊せそん、低聲こゝろにのたまへば、迦葉かせふは足あしを爪立つまたてゝ、  
「ヒヤリとします。」と渡わたりける。實じつにも此この

橋の下行く水は、涼しげながら悚然として、血汐の  
川と聞く所爲か、ツキノと胸に響き、夜陰を貫く  
ばかりなり。

さて、其の離れ屋の戸の隙を、迦葉先づ密と覗き、  
一目様子を見ると齊しく、吃驚したも道理にこそ。  
玉のやうな男の兒、清らに肥えて愛々しく、顔立も  
最と美しきを、首筋から胴中かけ、三所ばかりを荒  
縄以て大俎板に仰様に括りつけ、十八九の好い女、  
見る目も婀娜な美女が、あらう事が禪に及ばず、解  
いて捌いて颯と掛けた、黒髪を透く膚の色、薄桃色  
の諸肌脱ぎにて、其の俎板に鮮紅の蹴出しをはらり  
と片膝乗掛け、鋭き刃物の峰を返して、びたりと幼  
兒の胸に當て、今しも三枚に下るさう身構。

「や」と思はず聲立つる、迦葉の物  
越漏るゝゝや否や、花の顔八ツと見向き、柳の姿が、  
あらけない、風を起して板戸を突明け、其處に立つ  
たる二人を見るより、

「まあ、お前さん、不賤な！ 人の内へ許しも受

けずに、奥深く蹈込んで、大事な處を、よくも見た。  
最う活しては返されぬ、其處お動きでないよ。」「  
とて、飛蒐らむずる褻捌き、炎の搦むばかりなり。

驚破、お身の上、と身を以て遮る、迦葉の袖を留め給ひ、

「騒ぐに及ばぬ、靜かに」 と世尊の

お言葉終らぬ内、矢の如き風の音、蒼空より落し來て、斜めに吹入る別家の戸口。今飛蒐る、娘の胸を、向ふざまに押戻して、蹠踉めく處を、左右より、颯々、と吹萎め、刃物保つ手を眞前に、忽ち兩手を兩方から、犇と壓へて、霧の如く、霞の如く立顯るゝ、黄金の兜召したるは、廣目天の御姿。白銀の兜召したるは、持國天の御姿。

「あれ見よ、迦葉、娘は最早や身動きも叶はぬぞ。」

「こは抑も尊き御有様。」 と、迦葉は謹み膝を支く。

二天の大將、目のあたり、我を責むると思ひも寄らず。又淺ましき鬼の目の、兜の星も見えざれば、娘は單におのが手足の打萎まつて身動きならぬに、

こは無念なりと五體を悶えて立騒げば、廣目天、持國天、犍々と縛の繩に扱きを掛けて、骨も細れと引締め給ふ。

「あれ、痛い、苦い、我慢がならない、切ない。」  
と、刃物も何時か振落し、倒れも遣らず足折屈め、虚空を掴んで、反返り、雪の膚も蒼う成るまで、燈の影に消えなむとして、  
「助けて下さい、お二人さん。」  
と聲を絞つて泣き叫ぶ。

「おほ、助かりたくば、其の悪しき心を改めよ。」  
と、迦葉は屹と諭して言ふ。

「あゝ、此の上は何とせう。お前さんたち二人の生命は、取らうとしませんから、堪忍して下さいまし。」

「いや、われら二人を害せぬばかりで、其の苦痛は助からぬ。今まで犯した悪い事、罪な事が澤山あらう。懺悔をせよ。」

と迦葉が申す。

娘は絶ゆげな呼吸の下に、

「私は名を摩仁髪とて、取つて十九に成る處女、  
夫持たねば罪はない。悪い事か、善い事か、私には  
分らぬけれど、小兒を殺すが悪いとなら、悪い事は  
澤山しました。恚うして姉さんに世話に成つて、唯  
遊んでも居られねば、姉が三度の食にする、小兒の  
料理が日々の勤め。それが悪ければ謝罪ります。此  
の苦しさは堪へられぬ。あれ、切ない。」  
と言ひも敢へず、齒を食切つて手足を爛つ。

「能くこそ處女悌悔した。此の上は唯一言、南無  
とばかり稱へて見よ。立處に、其の苦痛  
は助かるぞ。」

と迦葉の教へに、摩仁髪は、もの思ふ暇もなく、  
「南無」  
と即座に言はむとするに、  
不思議や、舌縮まり、咽喉塞がりて、南とも無とも  
聲には出でず。急れば一層呼吸苦しく、唇の色も蒼  
褪むる。

「情なや。」

と言へば、言ふ聲の噎れしにあらざれば、苦しき中にも訝りて、

「不思議な事がござんする。今おつしやつた稱へごとは、私には申されぬ。何うしませう。」と切なさに、涙を流すばかりなり。

「然ればよ、處女、鬼畜の業を心から悪いと悟り、以後は夢にも人の兒を殺すまいと誓を立て、そして南無と稱へて見よ。」と世尊優しく悟させ給ひて、此方より徐ら手を以て、摩仁髪まにがみの胸むねのあたりを、搔撫かいなづる眞似まねしたまへば、悚然そつぜんとするほど、難有ありがたさ、又尊またたふとさの身に染しむより、氷こほりの溶とけし心地こころして、

「南無と稱ふる其の聲の、最も清

しく響くと齊しく、黄金こがねの兜かぶとの前立まへだてと、白銀しろがねの兜かぶとの鉦かねと、差向さしむかひに、ゆら／＼と、揺る／＼が如ごとく頷うなづき合ひ、縛いましめの繩なは引解ひきほどき、紫むらさきの霞かすみを立て、夏かつぜん然ぜんたる鎧よろひの音おと、槍やりの穂尖ほさきは晃々きら／＼と星ほしの流ながるゝ氣勢けはひして、廣目くわつもく、持國ぢこくの二天將てんしやう、空そらにぞ上のほらせたまひける。

夢ゆめのさめたる面おも色ちして、黒くろ髪かみを床ゆかに手てを支つきたる、  
處むすめ女の姿すがたの、罪つみを拭ぬぐひし清きよらかさ、天あま津つ乙をとめ女の如ごとく  
なり。

爾時、世尊のお指揮に、迦葉は急ぎ俎の上の魚なりし、彼の幼兒を扶け抱きて、

「處女よ、これなる幼兒は？」

と尋ぬれば、女らしう、今は面を赤らめぬ。

「其の坊ちやまは、然も今日、姉が奪うて参りたる、此の迦毘羅衛國の國主の王子にておはします。飢を凌がむ術には、王子も生捕る私たち、貴下がたの尊きは、日とも月とも申されぬ。今に姉も歸りませう。南無と一聲稱へてからの、此のまあ、清しい心持。姉にも分けて遣りたうござんす。何うぞ私と同じやうに教へてあげて下さいまし。」

世尊微笑ませたまひつゝ、

「おなじ血統の、和女たち。此の妹の姉なれば、逢はぬうちから頼母しい。如何にも、南無を教へよう、摩仁髪とか、心やすかれ、。」

「お嬉しう存じます。」

「迦粟よ、其の王子を伴ひ申せ。」

「臥戸へ行つて相待たう。」

「さあ、御案内いたしませう。」

と摩仁髪は姿を繕ひ、青い燈手に取つて、恥かしげに前に立つ。

恚くて奥まりたる以前の臥床、取残したる笈と、鐵鉢と、壁の他には何もなき、狭き臥床に入給ふ。

程もあらず、ぐわら／＼がらと、戸、障子、襖、鳴りはためき、床も、廊下も打震ひて、つむじ風の如く躍込む、凄じき婦あり。

眼血走り、髪逆立ち、電の如き青筋立て、世尊と迦葉の姿を見るより、手の爪に光を放ち、十口の劍を一掴みに、

「え、人買ひの拐誘漢、嬪迦羅を返せ、戻せ。私が嬪迦羅を返せ。」と言ふ。

「嬪迦羅とは何者ぞ。」  
と迦葉片膝立てければ、爪を逆立て、じりりと寄つて、

「人もこそ知れ、嬪迦羅は、私千人の兒の中に、  
九百九十九人に代へても最惜き、天地の間の一粒種。  
生命と思ふ童子なり。今日山巡りの留守の間に、宵  
の程より姿見え、岩を飛び、峰を駈け、眞逆様に  
谷に落ちて、木の葉の裏の星を取り、清水の底の砂  
を掴めど、露以て行方分らず。半狂亂と成つて歸る  
途中、此の家に近き、あの山蔭に、影のやうな沙門  
の居てゝみしが、御身の探す童子の行方は、今宵御  
身が家に宿れる行脚の僧よく知れり、急ぎ歸つて聞  
けよ、とあり。聞くも聞かぬも私が兒ぞや。何處へ  
か隠したる。さあ、此處へ出せ、早や返せ。汝等、  
出家の姿に似ず、拐誘は何事ぞ。其もよし、唯山賤  
の兒なりせば、泣崩折れても事過ぎむ。私を尋常の  
婦と思ふや。猫王やまを司る歡喜大王の姉娘、訶刹  
帝母と知らざるか。」  
と齒齧をして立つたる有様、鬼が鬼に成つたれば、  
尋常の婦と誰か見る、凄じかりける風情なり。

世尊悠然と遊ばして、

「そなたが餌になさむとて、晝間奪ひし王子を助  
けて、こゝに同行の膝に抱ける外、兒らしきものは

見もせず。」

と落着澄ましてのたまへば、頭を掉つたる、黒髪  
蠢めき、

「嬪迦羅を秘せしは、汝ぞと人も言ふ、私も爾覺  
ゆるぞよ。凡そ我が家は、床下、押入、目に見えず  
と言ふことなし。井の中さへ明かなるに、何處へや  
秘したる。や、其の笈の中さて可怪。彼なくてば我  
片時も活きられぬ。嬪迦羅の顔を見た上で、やはか、  
汝達活けゝ置かじ。いで／＼。」

と言ふまゝに、唯手を支へて首垂れし、一妹  
摩仁髪の肩とも言はず、一躍りに刎越えて、笈に手  
を掛け、手許へぐい、と塵とも思はず曳かむとする  
時、世尊御法衣の袖の中に、磐石の印を結ばせ給へ  
ば、附木ほどもなき笈の、如何にやしけむ、山の  
如く、坤軸より根を生やして、一寸も動かばこそ。

「コハ可怪、然りながら、笈の我手に動かぬは、  
よも汝達の通力ならじ。我が兒が中に籠りたる、我  
が恩愛の重さにこそ。よし／＼然らば、唯戸を開け  
て、抱取らむ。」

と笈の蓋に、諸手を掛けて、掴めど、引けど、捻

ぢけれども、爪の立つべき透間も明かず。訶刹帝母は見る／＼内に、肉痩せ、骨露れ、満身紅の汗を絞りて、黒き呼吸を吐いて喘ぎ、

「口惜の我が力、など慙くばかり効なきや。無念なり、然りながら、憎き汝達を殺せばとて、嬪迦羅なくば何かせむ。誓つて仇はすまじきに、唯頗迦羅を返されよ。」

と言も弱つて溜息つき、呆れ果てゝぞ居たりける。

「如何に帝母、千人の子を持ちてさへ、一人の子に身を碎く、今其の思を知りつらむ。況してや人間は、多きも五人、少なきは唯一人、十人の子を持つは少なし。既にこれなる迦嬪羅衛城の王子を見よ。

國主の唯一人の世嗣なるを、會釋もなく奪ひ來て、妹の摩仁髮に料理させ、肉を啖はむとしたるは誰ぞ。いで、其思ひに引較べて、人の親の心を察し、今より以後、誓つて悪業を働かず、人の子を啖ふことを、堅く思ひ留まるならば、嬪迦羅を返し得させむ、如何に？」

と世尊の仰せある。

「姉さん、おわびをなさいまし。お上人さん、最  
う可うござんす、堪忍してあげて下さんせ。」  
と姉の心を掬む涙、わつとばかりに泣伏したる、  
處女の情の優しさよ。

「いざ／＼如何に、今の仰せを聞かれしか。疾く  
心を翻し、南無と一聲稱へられよ。鬼と  
は知れども目前、子を思はるゝ状を見ては、それが  
しも落涙した。唯、南無と稱へたまへ。早や嬪迦羅  
に逢はれよ。」  
と膝を枕に疲れ臥したる、王子の背を擦りつゝ、  
迦葉も傍より口を添ふ。

「意地も我慢も早や是れまで。妾此の世に生れて  
より、人の子の肉の外、他に食物の味を覺えず。今  
爰に誓を立てゝ、假ひ食に飢うればとて、嬪迦羅な  
くば活きるに效なし。唯嬪迦羅に逢はせたまへ、南  
無。」  
と稱ふる聲より早く、笈の蓋は颯と取れて、二と  
輝く光明の、白蓮の蕊に月ある中に、嬪迦羅童子は  
莞爾々々と母様の顔を見る、其の藹たさ、愛らしさ。

継りつき、抱き緊め、片時の思に瘦せたる、乳房を頬に押當て、現の如く抱占めしが、やがて摩仁髪に子を預け、其の身は衣紋を繕ひて、

「此、の嬉しさを思ふにつけ、顔見ぬ時の悲しさを、尚一層に思遣る。然候へば今までに、夥多の人の子を取りて、親を泣かせし償ひに、いざ、これよりは猫主山なる訶利帝母の力を以て、あらむ限りの人の子に、鬼も魔も近づけず、病をも受けさせず、悪き夢も見させまじ。なほ其の上に産婦を守護して、胎内にも恙あらせじ。御佛、力を添へさせたまへ。」と誓はせたまひし、是ぞ鬼子母神にておはします。

御心は頬に出づる、物凄まじき鬼の面、忽ち變じて端麗微妙、玉の芙蓉の御顔、振仰いで、手を合せたまへば、

「珍重にて候。」

とて、大聖世尊釋迦牟尼佛も合掌したまふ尊さよ。

世尊かさねてのたまふやう、

「然りながら、食すものなくては叶ふまじ。我よきものを見置きたり。迦葉よ、先刻に参りたる、あ

れなる離屋の窓の外に、美しき一樹あり。大なる實を結べり。長へに人の血汐を、其の根に灌ぎて培ひたれば、味ひ甘く且つ酸くして、人の肉に異ならず、汝行きて取り來れ。」

「はい、私が参ります。」

と摩仁髪が、急ぎ出で、やがて枝ながら取り來る、實は未だ其の時白かりし。世尊御手に取りたまひ、彼の鐵鉢に装らせたまへば、立處に紅玉を嚙んで、涼しき實をぞ列ねたる。吉祥果とは是とかや。我が國の柘榴とぞ。此の時より猫王山の血の小川は、甘き乳の流となりけり。

【完】